近世東北大名家墓所における五輪塔の型式学的研究
―― 変遷と地域性 ――

A Typological Study of Gorinto Pagodas in the Cemeteries of the Great Families of the Tohoku Region in the Early Modern Period
－ransition and regionalism－

吉田　麻鈴　YOSHIDA Marin

要　旨

五輪塔の型式学的研究はその資料数の豊富さから中世墓に偏っており、近世のものについて各墓所での調査・研究はあるものの、中世墓と比べ地域差が顕著なことからその型式学的研究は殆どない。本研究では、主な墓標型式に五輪塔を採用している中村藩相馬家墓所五輪塔について型式編年を行った上で、この編年を基軸とし、近世東北大名家墓所における五輪塔の形態変遷や地域性について型式学的側面から比較・検討を行った。

キーワード：近世大名家墓所　五輪塔　型式編年

1. はじめに

近世において全国の大名家は、各々国元や江戸、高野山に菩提所を構え、墓所を展開していった。松原典明による『近世大名葬制の考古学的研究』（松原2012）は近世大名墓の総論的研究として挙げられ、近世大名墓所の構成様式や武家社会における墓制、喪禮実践の思想等、様々な視点による近世大名墓の分析から、神道・儒教・仏教に基づいた近世の墓に対する思想の解明を行っている。

そのため様々な思想が取り巻く大名家墓所において、墓標の形式も角柱・櫛形墓標等位牌形をとるものや五輪塔、宝篋印塔、自然石など実に多種多様である。その中でも五輪塔は、平安期に日本に供養塔として流入して以来、中世・近世に渡り墓標として造られ続けてきた。

中世五輪塔の研究は資料数が多いことから数値データを利用した型式学的研究が盛んに行われており、辻俊和は近畿地方の中世五輪塔を対象に数値データと形態分類による編年を試みている（辻2012）。辻はこの編年に各輪の数値データを積極的に活用しており、型式分類の根拠に定量的なデータを用いることで客観性を持たせている。

しかし上記のような研究は中世墓に留まり、近世五輪塔が対象にされることは殆どなかった。その中でも関根達人は松前城下寺院の別石五輪塔102基を対象に、型式と石材使用から形態変遷の動向を探り、五輪塔の規格化について比率から分析・検討を行った（関根2010）。前者の形態変遷の動向分析では86基を対象とし、画期がⅠ期（1636～1676）、Ⅱ期（1678～1719）、Ⅲ期（1720～1866）の3期に分けられるとした。後者の比率による五輪塔規格化の検討では、各輪の縦横比と塔高に対する各輪高の割合から割付の手順を考察し、比率は時期によって分かれていないため時代判定には用いるべきでないとしている。しかし当研究では計11寺院に所在する五輪塔を一括して扱っているため、寺院間の五輪塔の差に配慮していない。そのため一概に比率が時代判定に用いることができないとは言い切れない部分が指摘できる。

また東北諸藩における墓所造営に関しては、関根が各大名家墓所の墓標概要をまとめており（関根2014）、関口慶久は造墓数の数量的把握から、関東諸藩との比較の中でその動向を検討し、成立期（16C末～17C末）、安定期（18C～19C前半）、変化・終末期（19C後半）の3期に区分できるとした（関口2020）。

以上のことから、これまで近世期のものについて各大名家墓所での調査・研究はあるものの、中世墓と比べ地域差が顕著なことからその型式学的研究は殆どないと言える。

そこで本研究では、対象を東北地方の近世大名家墓所に設定し、主な墓標型式に五輪塔を採用している中村藩相馬家墓所五輪塔について型式編年を行った上で、この編年を

基軸とし、近世東北大名家墓所における五輪塔の形態変遷や地域性について型式学的側面から比較・検討を行っていく。

2. 中村藩相馬家墓所五輪塔を中心とした変遷

2－1：研究方法

第2～3章では辻（2019）による数値データを利用した型式編年の方法を参考に、トレース図を用いて形態による分類・数値からの検討を行う。

本研究では実測図が現状ない墓所について、フォトグラメトリー（SfM-MVS）の手法を用いてオルソ画像を作成し、トレースを行なって作図する方法をとった。現地で墓標基礎部、地輪部の寸法を計測、またオーバーラップさせて撮影した墓標画像を「Agisoft Metashape」でオルソ化した後、「Adobe Illustrator2022」上でトレース、同ソフトのグリット線機能を用いて実測した部位を基に縮尺を合わせ、墓標の寸法を計測した。

形態による分類では、五輪塔の形態という視点から、特に顕著に違いが見られる箇所を抽出し、その相違によって分類する。また墓標に刻まれている文字の形式や使用されている岩石種等の他属性も参照し、検討していく。

数値からの検討では、トレース図から得られた寸法を基に、塔高に対する各輪の割合や高さ指数による各輪の相関関係、また形態的に最も変化が大きいと思われる火輪に注目し、火輪高さ指数と軒口開き度の相関、火輪高さ指数と火輪高に対する軒厚の割合を算出し、時代や形態の変化と共に寸法がどのように変化しているのかを検討していく。

尚、本研究における五輪塔の造営年は文献等に記述がない場合は紀年銘、どちらも確認できない場合は木村礎ほか編『藩史大事典』（1988 雄山閣）や各藩が公儀として記録している文献を参照し、被葬者の没年と造営年は同年であると仮定し進めていくこととする。

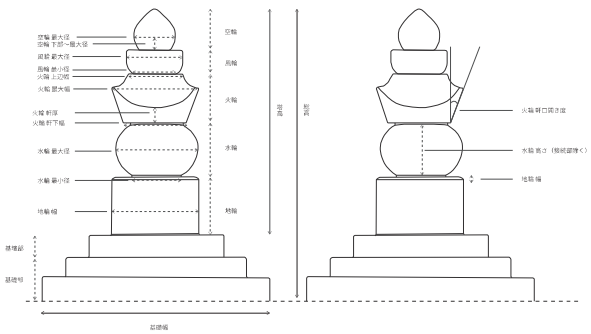

図1：五輪塔模式図

2－2：同慶寺相馬家墓地五輪塔の型式編年

本項では主な墓標型式に五輪塔を採用している同慶寺相馬家墓地（福島県南相馬市）について前項の方法を用いた分析・検討を行った。

(1) 形態による分類

まず形態上で大きく違いが見られた、空輪頂部のくびれの有無、火輪高に対する火輪軒厚の割合、火輪軒口の開き度、火輪軒上辺の稜線形態の4点に着目し、型式分類を行なった。

初めに空輪頂部のくびれの有無によって分類を行い、くびれ有、くびれが有る且つ先端部が突出しているもの、くびれ無の3つに分類した。

次に火輪高に対する火輪軒厚の割合を算出し、28％未満と28％以上の2クラスに分類した。結果、28％未満となったのは相15、相16、相17、相27でありその他は28％以上に該当した。

火輪軒口の開き度は、計測結果から小（15.0°未満）、中（15.0°以上25.0°未満）、大（25.0°以上）の3クラスに分けられ、4基が小、8基が中、3基が大に該当した（26は火輪の風化が大きいため計測不可）。

また火輪軒口上辺の稜線形態については湾曲、緩やかな湾曲、平行であるものの3つに分類し、7基が湾曲、2基が緩やかな湾曲、6基が平行に該当した。

これらを総合すると分類a、b、c、dの4つに分けられる。尚、この分類上では相12は分類a、b、相15は分類c、dの境界に位置する。

次に文字形式や岩石種といった形態以外の属性による分類を行なった。

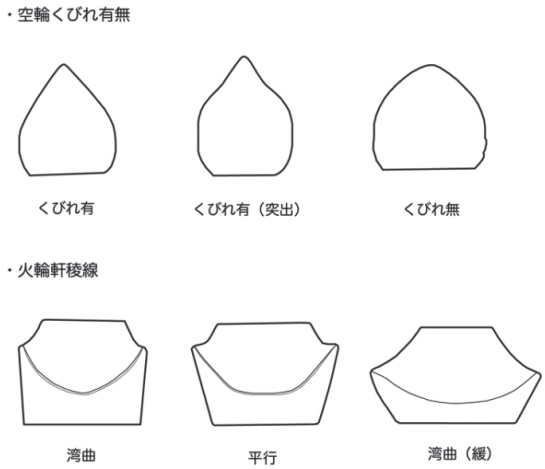

図２：同慶寺相馬家墓地五輪塔 空輪くびれ有無・火輪軒稜線の形態

No.	墓標No.	没順	火輪			空輪
			軒厚/火輪高	軒口開き度	稜線	くびれ有無
1	相1	1	31%	6°	湾曲	無
25	相25	2	32%	5°	湾曲	無
26	相26	3	0%	0.0	不明	後補
2	相2	4	29%	10°	湾曲	無
12	相12	7	34%	10°	湾曲	有（突出）
14	相14	8	31%	15°	湾曲	有（突出）
13	相13	9	36%	15°	湾曲	有（突出）
27	相27	10	25%	18°	湾曲	有（突出）
5	相5	11	31%	17°	平行	有
6	相6	12	30%	15°	平行	有（突出）
4	相4	13	28%	22°	平行	有
7	相7	14	32%	19°	平行	有
8	相8	15	34%	20°	平行	有（突出）
15	相15	19	24%	29°	平行	有（突出）
16	相16	20	20%	30°	湾曲（緩）	無
17	相17	21	16%	48°	湾曲（緩）	無

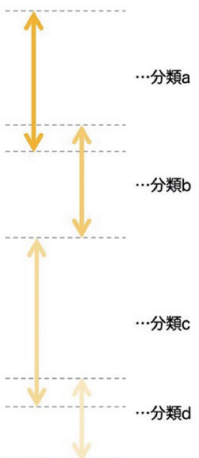

図３：同慶寺相馬家墓地五輪塔 ４項目による型式分類

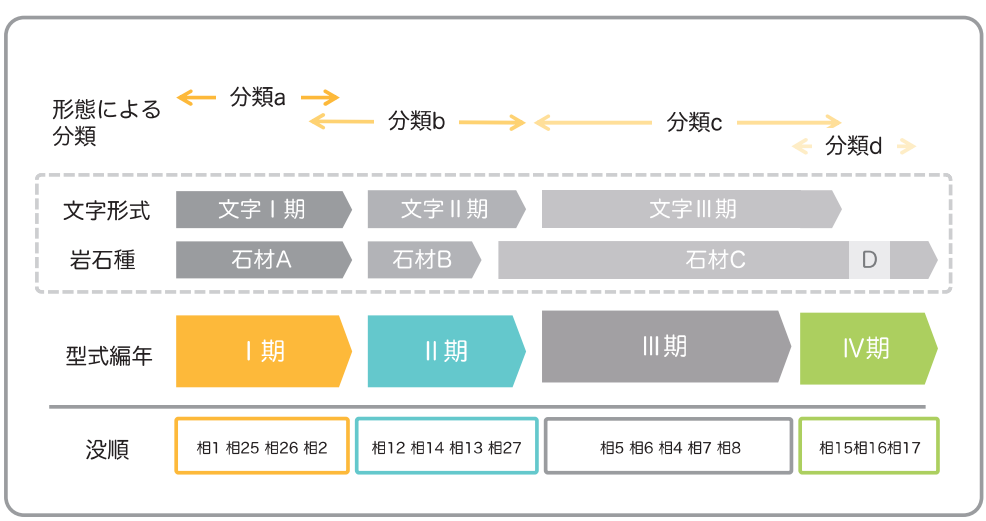

図４：同慶寺相馬家墓地五輪塔 編年図

文字形式による分類では、地輪から空輪の各輪に刻まれている文字を篆書・楷書の2つに大別した後、文字の形の違いから1～3タイプに分け、文字の彫り方も考慮し分類を行った。結果、書体が篆書かつ平彫の文字Ⅰ期、書体が篆書かつ薬研彫、風輪が篆書'タイプの文字Ⅱ期、書体が楷書かつ薬研彫の文字Ⅲ期の3期に分類することができた。対象から除外した相11は文字形式という点においては文字Ⅱ期に分類できるが、同期に分類された他五輪塔と比較すると没年は約100年後であるため、時流とは別の意識から文字形式を選択したと推測できる。

岩石種は塔身部の石材によって4種に区分でき、地元産の砂岩質凝灰岩と考えられる石材A、粗い花崗岩の石材B、Bと比較し粒子の細かい花崗岩の石材C、灰色みのある花崗岩の石材Dが見られた。

以上を踏まえ、形態によって分類した型式分類を上記2属性の分類と対照させると、Ⅰ期（相1・相2・相25・相26）、Ⅱ期（相12・相13・相14・相27）、Ⅲ期（相4・相5・相6・相7・相8）、Ⅳ期（相15・相16・相17）の4期に分類することができる。

⑵　数値からの検討

先述した分類を基に、ここでは寸法の数値データを用いて形態変遷の動向を検討していく。

まず塔高に対する各輪の割合を見ると、Ⅰ期五輪塔は相2を除き、空風輪≒地輪＞火輪≒水輪という大小関係になっており、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期では例外はあるものの空風輪＞地輪＞火輪≒水輪の割合で割付されている。

次に高さ指数による各輪の相関について、火輪と地輪、水輪と地輪の相関を検討した。分布図を見るとどちらの相関からも相26、相1・相2・相25の五輪塔は同群として区別することができ、後の時代の墓標と当群墓標間に大きく差があることからここに1つの画期があったと考えられる。また時代が下るにつれ各輪とも数値が小さくなっており、縦長から横つぶれの形態に変化していることがわかる。

また火輪高さ指数と軒口開き度の相関について、屋根が開くほど高さ指数が小さくなる傾向があり、時代が下るにつれその傾向は強まっている。加えて火輪の軒厚は火輪高に対応が見られるため、屋根が開くほど高さ指数は小さく、軒も薄くなるという相関が見られる。

以上の分類・検討から同慶寺相馬家墓地五輪塔はⅠ～Ⅳ期の4つの画期に分かれて型式が変化しており、数値による検討から特にⅠ期とⅡ～Ⅳ期間には大きな画期があると考えられる。また編年と寸法の変化の流れは対応が見られ、塔部は時代が下るごとに縦長から横つぶれになり、火輪は高さ指数が低くなり軒が薄くなるにつれ軒口が開くという傾向が見られた。

相馬家墓地五輪塔の特徴としては同一墓所内で形態変遷が見られる点が挙げられ、時代の流れに伴って形態や意匠が変化している。しかし、塔高に対する各輪の割合や各輪の相関に見られるように各輪の割付は何らかの一定の規定を設けて行われていたということが推測できる。

3. 近世東北大名家墓所五輪塔を中心とした変遷

本章では、旧陸奥国・出羽国に治所を構える藩の中から、五輪塔を墓標として採用している弘前藩主津軽家墓所（青森県弘前市）、八戸藩南部家墓所（青森県八戸市）、盛岡藩主南部家墓所（岩手県盛岡市）、二本松藩主丹羽家墓所（福島県二本松市）、白河藩大名家墓所（福島県白河市）、亀田藩主岩城家墓所（秋田県由利本荘市）を対象に、形態・意匠による分析と前章で挙げた数値による検討を行った。

また近世大名家が比較的統一された型式の墓標で分霊墓を設けていた高野山における、高野山遍照尊院旧弘前藩主津軽家墓所も対象に含め、全国における近世期の大名家墓所五輪塔の形態変遷の動向についての指標として参考にした。

3－1：弘前藩主津軽家墓所（青森県弘前市）

当墓所では津1～津9まで殆ど一貫した型式をとっていることが特徴である。しかしその中でも津10のみ他五輪塔と異なる点が多々あった。津10は当墓所で最も没年が古い3代信義墓であり、国元で墓標として石造の五輪塔を採用したのはこれが最初である。菩提所として報恩寺が建立された17C半ばは徐々に西廻り航路が整備し始めた時期であることから（関根2010）、津10のみ石材産地の石工が造ったものを弘前で墓標として採用し、津10を基にして後の時代から地元産の安山岩を用いた規格的な形式の五輪塔を安定して造営していった可能性も考えられる。また3代のみ本葬墓であることも、他との型式の差に何らかの影響がある可能性も指摘したい。

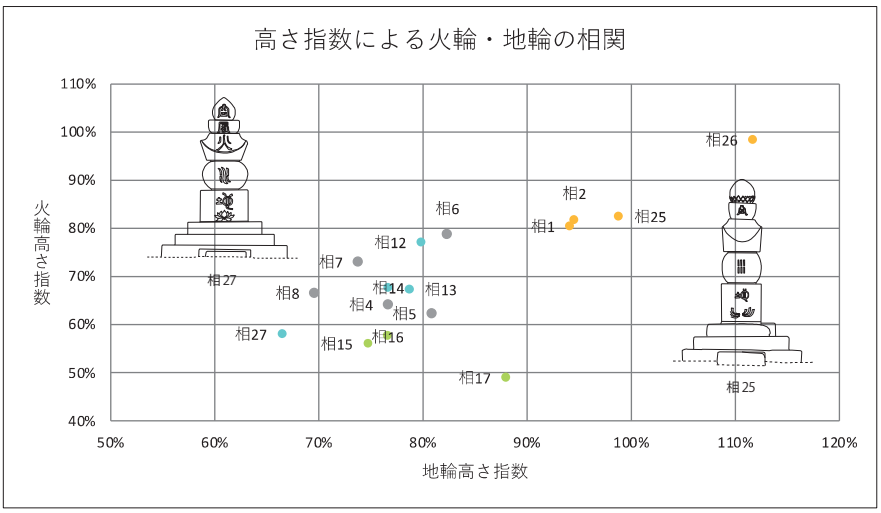

図５：同慶寺相馬家墓地五輪塔 高さ指数による火輪・地輪の相関

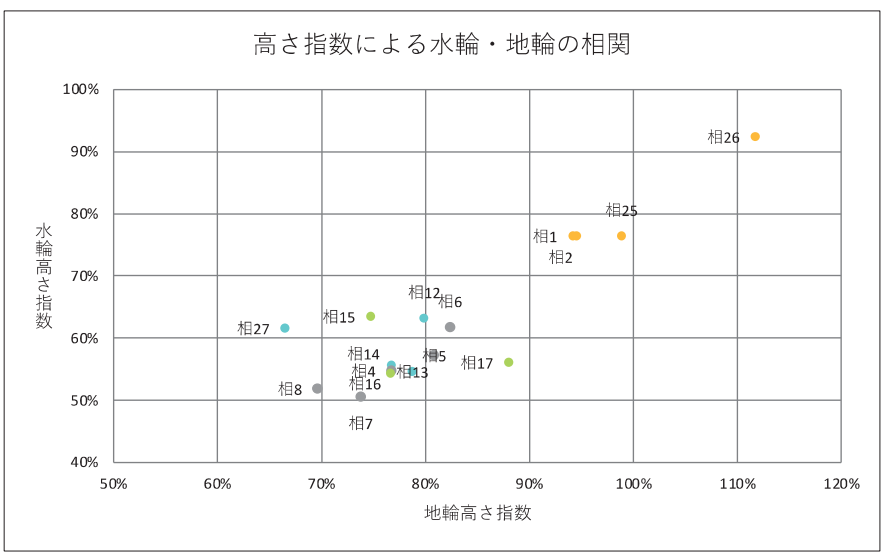

図６：同慶寺相馬家墓地五輪塔 高さ指数による水輪・地輪の相関

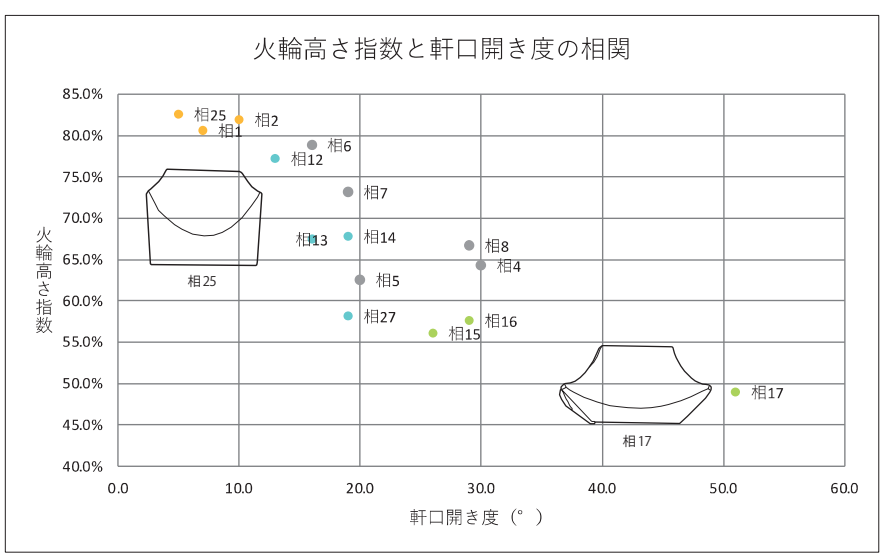

図７：同慶寺相馬家墓地五輪塔 火輪高さ指数と軒口開き度の相関

3－2：八戸藩南部家墓所（青森県八戸市）

八戸南部家墓所五輪塔は、意匠では藩主墓郭と家族墓郭で区別されており、藩主墓郭内でも時代が下るにつれ少しずつ曲線を多用したデザインに変化している。また数値からは当墓所五輪塔は火輪において八11・八15・八17と以外の間に大きく画期が見られた。八11・八15・八17は比較的火輪が縦に長く軒口があまり開いていないのに対し、それ以外では軒が薄く軒口も大きく開くようになる。この火輪の変化は塔部に対する各輪割合の割付の変化と若干対応しており、八11・八15・八17周辺の時期は割付のタイプが様々あるのに対し、それ以降は空風輪＞水輪≒地輪＞火輪の割付に沿って造られていることがわかる。そのため、当墓所で五輪塔造営が安定し始めたのが18C初頭に当たる時期だと推測できる。

3－3：盛岡藩主南部家墓所（岩手県盛岡市）

盛岡南部家墓所における五輪塔は各輪で共通する形態や法号・没年の刻み方をとっていながらも、塔高に対するそれぞれの割合や意匠の違いから別々の規格で作成されたことが推測できる。その中で藩主や藩主母といった藩内で比較的身分の高い者同士で共通性が見られることから、五輪塔のバリエーションの豊さは身分差が要因であることが可能性として挙げられる。当墓所における他形式の墓標でも藩主とそれ以外では一見して大きさや玉垣の有無といった差があるため、身分差による型式の違いはあるのではないかと考えられる。

3－4：二本松藩主丹羽家墓所（福島県二本松市）

当墓所の五輪塔は、五輪から成り「空」「風」「火」「水」「地」の文字が刻まれているといった五輪塔としての形を成しつつも、塔とは別に竿石があり各輪文字の刻まれる位置が一般的な五輪塔と異なるというような点から、五輪塔部分は墓標における装飾、或いは供養の象徴としての役割を担っているのではないかと推測できる。その中でも空輪や火輪の形態、高さ指数による相関に注目すると丹1・丹4～丹6と丹2・丹3の大きく2タイプに分かれており、墓標間で差異が見られるため、造り手や被葬者の意向等の違いが五輪塔部分に現れていると考えられる。

3－5：白河藩大名家墓所（福島県白河市）

白河藩大名家墓所五輪塔は意匠や形態、規格の違いから白1と白2・白3という2タイプの五輪等が所在していることが分かった。この2間の差異は同墓所内でありつつも被葬者の家柄が異なることが起因すると考えられ、墓所内の位置関係も清照墓のみ他2基から離れた位置にあることからこれら2家の五輪塔は別のものとして扱うのが妥当だと考える。当墓所五輪塔は、同地域で造られたとしても家や被葬者の思想・意向等によって全く異なる形式の五輪塔が造営される例として挙げられよう。

3－6：亀田藩主岩城家墓所（秋田県由利本荘市）

亀田藩主岩城家墓所五輪塔は時代が下るにつれ、やや横つぶれになる傾向があり、岩石種や法号没年の刻み方も時代によって変化している。その中でも岩石種や文字の刻み方から岩1・岩2と岩3以降の間に1つの画期があるように考えられる。被葬者の没年から岩1・岩2は18C前半、岩3～岩5は19C半ば以降に造営されたと推測すると、時代幅が大きいことからその間に主に石材選択という点において何らかの変化があったことが指摘できる。

3－7：高野山遍照尊院旧弘前藩主津軽家墓所（和歌山県高野町）

形態・意匠は時代に伴って緩やかな変化を示しているのに対し、寸法としての変化は時代変化に対応していなかった。数値の変化は時代の推移に対応していないことと、火輪と水輪が同割合であるものが大半を占めていることから、火輪・水輪を同じ割合にすることを前提とし、それぞれの高さ指数が変化するに応じて、塔全体のプロポーションが変化しているのではないかと推測できる。このことから、造り手である石工の変化や被葬者の意向等の差異があったと仮定して、それらは形態や意匠といった部分に現れ、塔としてのプロポーションは何らかの規格に則り決められていたのではないかと考えられる。

以上の大名家墓所五輪塔の分析・検討を基に全墓所五輪塔に見られる変遷の動向や地域性について考察していく。

①数値にみる変遷

寸法上では、各墓所でそれぞれの規格に基づき造られながらも、全墓所で共通する部分がいくつか見られた。

まず挙げられるのは、火輪の形態変遷である。全対象において特に時代による変化が見られた部分が火輪であったが、

どの墓所においても火輪高さ指数、火輪高に対する軒厚の割合、そして軒口の開き度には相関が見られ、値が大きくなると軒口の開きは小さくなり、一方もしくは両方の値が小さくなると軒口の開きは大きくなる傾向が一貫して見られた。またこの相関は時代と共に変化し、前者から後者に推移する様子がどの墓所でも見受けられた。この推移は火輪全体として扁平化し、それに伴って軒が薄く、末広になることで軒口が開いていくという形態変遷の様子を表している。盛岡藩主南部家墓所・高野山弘前藩主津軽家墓所五輪塔では、時代による推移は見られなかったものの相関は見られたため、火輪部形態の構造上、製作するにあたって高さ指数と軒厚、軒口の開きは相関関係を持って寸法が取り決められていたのではないかと推測できる。

また火輪以外の部材でも、塔高に対する各輪高の割合や各輪同士の高さ指数は、一定の規格や相関を有して変化していることがわかった。本研究ではこの傾向が時代毎に緩やかな変遷を辿る場合（同慶寺相馬家墓地・八戸藩主南部家墓所五輪塔）と時代を問わず一定の規格・相関が見られる場合（盛岡藩主南部家墓所・高野山弘前藩主津軽家墓所五輪塔）に分かれた。二者間の違いについて、関わった石工集団の変化の有無や他要因が考えられるが、今回は違いがあることの提示のみに留めておく。

上記のような五輪塔の形態変遷において、同慶寺相馬家墓地の4期に区分した編年をはじめ、各墓所内で画期が見られるものがいくつかあった。同慶寺相馬家墓地の4期区分の中でも、Ⅰ～Ⅱ期（1645～1673）間では形態上で大きな変化が見られ、Ⅱ～Ⅲ期（1686～1711）間では文字形式に大きな変化があった。他墓所でも17C第3四半期～末に形態や意匠上の変化が多く見受けられる。関根による若狭小浜藩主酒井家墓所（江戸牛込 長安寺）における墓所形成の画期についての考察では、Ⅰ期は1662年以降、Ⅱ期は1720年以降、Ⅲ期は1784年もしくは1808年以降にあるとしており、江戸にある墓所でも類似した墓所の変遷がみられる（関根2019）。第1章で挙げた関口による数量的把握に基づいた関東・東北諸藩大名墓の造営変遷の研究（関口2020）においても、17Cから18Cは大名墓所の成立期から安定期に移行する時期であり、全国規模の画期であったかについては検討が不十分であるが、少なくとも東北諸藩の墓所造営においてこの時期に何らかの画期があったのではないかと推測できる。

②形態・意匠にみる地域性

形態・意匠という点では、各墓所でそれぞれ個性豊かな五輪塔造営が行われていた。

空風輪部は、従来からの宝珠形の空輪と鉢形・椀形の風輪との組み合わせで成っているものをはじめ、弘前藩主津軽家墓所五輪塔のように同石から成り、空輪部が壺形のもの、八戸藩南部家墓所・盛岡藩主南部家墓所五輪塔のように空風輪の代わりに宝篋印塔の相輪・露盤が採用されているもの等様々な形式が見られる。他に宝篋印塔と関連があるものとしては、二本松藩丹羽家墓所五輪塔の火輪部に宝篋印塔における隅置のような意匠が見られる例が挙げられよう。

主に竿石としての役割を果たしている地輪は、横長の形態をとり正面両側に法号や没年月日を刻むもの、立方体の形態をとり額縁を彫って法号・没年月日を刻むものといった差異が見られた。

また文字形式では、中世五輪塔に引き続き梵字を採用するものをはじめ、篆書体や楷書体等で「空」「風」「火」「水」「地」と刻むもの、文字は地輪の法号・戒名以外刻まないもの等、様々である。篆書と楷書間には時期の差異が見られるが、梵字と漢字の採用においては松前城下の墓所や同慶寺相馬家墓所・大聖寺相馬家墓所等、関連墓所内でも混在して見られる例があるため、被葬者の思想や意思が強く反映されたことが伺える。

以上のように、平安期に日本へ伝えられ供養塔としての役割を担っていた五輪塔は、近世に至るまで、宝篋印塔との融合や二本松藩丹羽家墓所の装飾的役割を担う五輪塔のように性格が大きく変化してきた。中世墓に比べ、多種多様となった形態・意匠から、各家の国元における墓所で「墓標」として個性を表している様が見られる。この様相から中世五輪塔とは、別の家としての意識が近世の五輪塔造営に働くことで形態や意匠として表象化し、各大名家の個性を孕んだ五輪塔が造られるに至ったと推測できる。

4. おわりに

本研究では、近世東北大名家墓所における五輪塔について、形態・意匠の分析や数値による検討からそれぞれの変遷動向や地域性を比較・検討した。

その中で、各大名家によって様々な個性を表現しながらも、一定の規格や相関を有して変遷していく中に共通性が見られた。これは、大名家毎に規格を設定していながらも五

輪塔という構造物を造るにあたり何らかの共通した認識があったことを意味する。また形態において17C 第3四半期～末に集中して変化がみられ、先行研究と照らし合わせると墓標の変化だけでなく、墓所全体としての変化がそれらの時期にあったことが伺える。

しかしこの画期が全国の大名家墓所に共通するものかといった検討には至らなかったため、江戸で没した藩主墓五輪塔の検討や石工集団・石工技術や石材流通との関連性、墓所としての宗教性等、本研究で触れることのできなかった視点から追求することで、近世大名墓所の変遷動向がより明瞭に掴めるのではないかと考える。

【参考・引用文献】

・松原典明 2012『近世大名葬制の考古学的研究』雄山閣

・辻俊和 2012「近畿＜五輪塔＞」
『中世石塔の考古学 五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布』高志書院

・関根達人 2014「地域における近世大名墓の成立4–東北」『近世大名墓の成立 信長・秀吉・家康の墓と各地の大名墓を探る』雄山閣

・関口慶久 2020「関東・東北の大名墓の展開」『近世大名墓の展開 考古学から大名墓を読み解く』雄山閣

・藤澤典彦・狭川真一 2017『石塔調べのコツとツボ–図説 採る 撮る 測るの三種の実技－』高志書院

・相馬市史編纂会 1969『相馬市史4 資料編Ⅰ(奥相志)』相馬市

・小高町教育委員会 1975『小高町史』小高町

・今野美寿 1979『相馬藩政史(上巻)』東洋書院

・岩崎敏夫・佐藤高俊校 1999『相馬藩世紀1』続群書類従完成会

・岩崎敏夫・佐藤高俊校 2002『相馬藩世紀2』続群書類従完成会

・浪江町史編纂委員会 2008『浪江町史 別巻Ⅱ 浪江町の民俗』福島県双葉郡浪江町

・木村礎ほか編 1988『藩主大事典 北海道・東北編』雄山閣

・関根達人 2010『近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究』弘前大学

・関根達人編 2016『弘前市英秀寺・長勝寺津軽家霊屋内部調査報告書』弘前大学人文学部文化財論研究室

・藤田俊雄 1990「八戸藩南部家墓所について(1)・(2)」『弘前大学国史研究』88・89 弘前大学国史研究会

・盛岡市教育委員会 1998『聖壽禅寺南部重直墓発掘調査報告書』盛岡市教育委員会

・二本松市 1999『二本松市史 第1巻 原始・古代・中世・近世 通史編1』二本松市

・白河市 2006『白河市史 第2巻 通史編2近世』白河市

・白河市教育委員会 2012『白河藩大名家墓所調査報告書』白河市教育委員会

・本荘市 1994『本荘市史 通史編Ⅱ』本荘市

・本荘市 1986『本荘市史 史料編Ⅲ』本荘市

・岡本桂典ほか編 1988『旧弘前藩主津軽家墓所石塔修理調査報告書』遍照尊院

・税田脩介・佐藤亜聖 2020「高野山奥之院における近世大名墓の展開」『近世大名墓の展開 考古学から大名墓を読み解く』雄山閣

・関根達人 2019「若狭小浜藩主酒井家の墓制－江戸と国元、本葬と分霊－」『人文社会科学論叢』6 弘前大学人文社会科学部

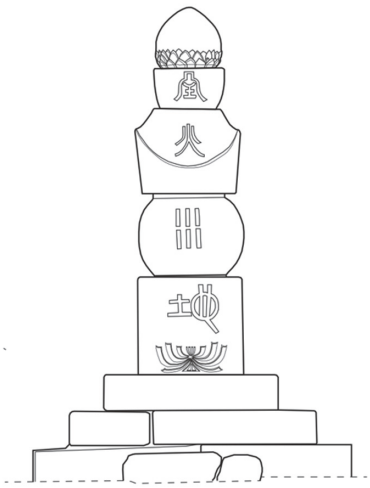

図８：同慶寺相馬家墓地　相１

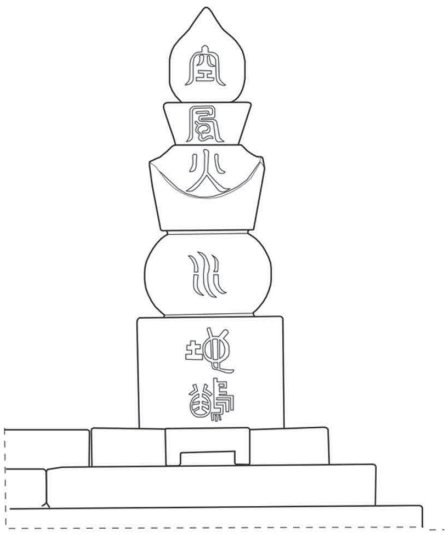

図９：同慶寺相馬家墓地　相12

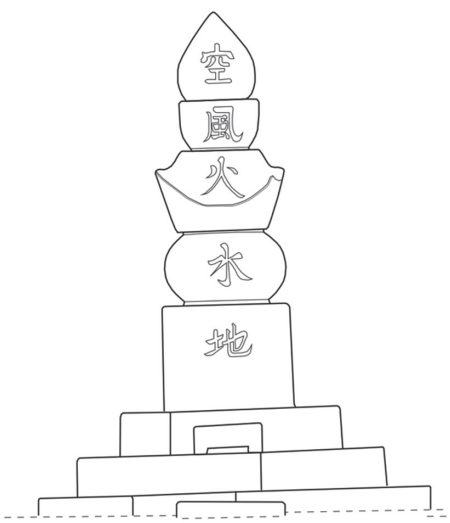

図10：同慶寺相馬家墓地　相5

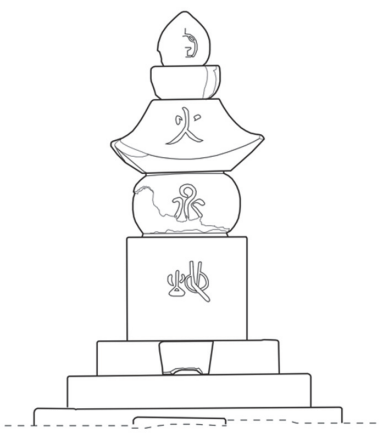

図11：同慶寺相馬家墓地　相17

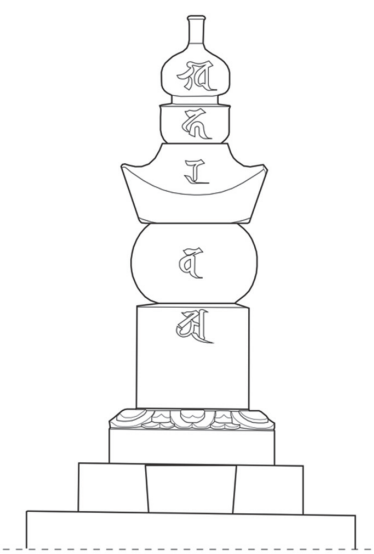

図12：弘前藩主津軽家墓所　津1

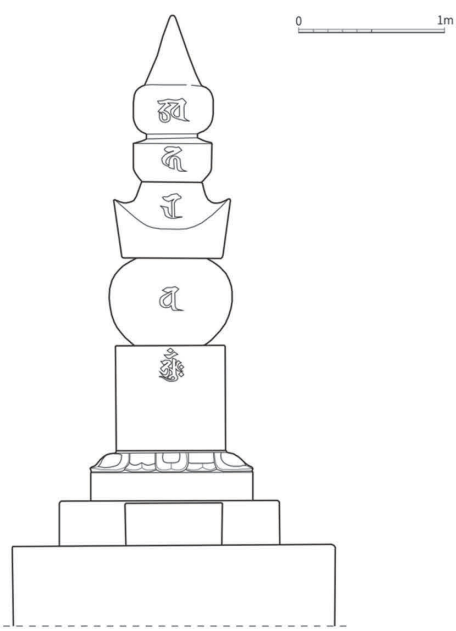

図13：弘前藩主津軽家墓所　津10

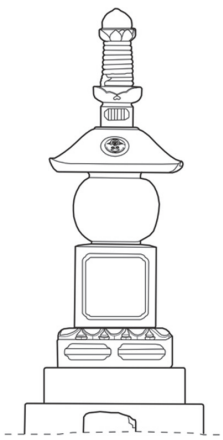

図14：八戸藩南部家墓所　八1

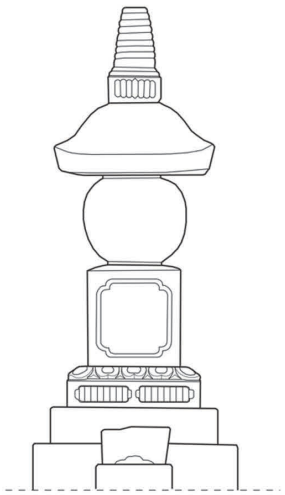

図15：八戸藩南部家墓所　八15

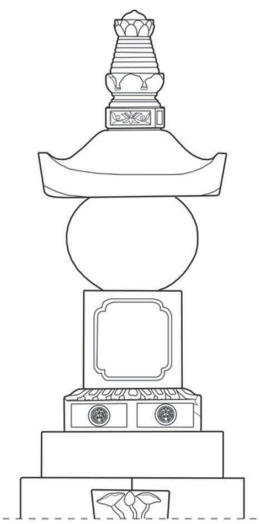

図16：盛岡藩主南部家墓所　盛1

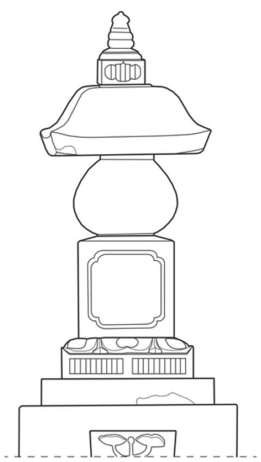

図17：盛岡藩主南部家墓所　盛3

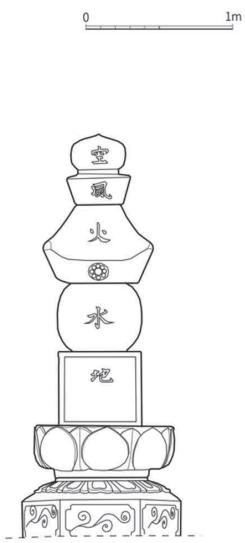

図18：白河藩大名家墓所　白1

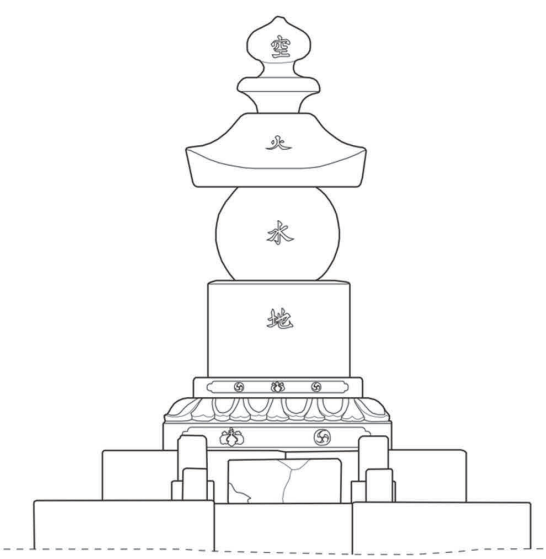

図19：白河藩大名家墓所　白2

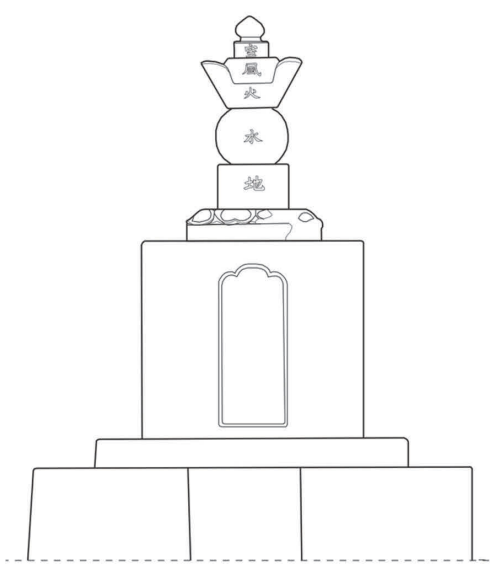

図20：二本松藩主丹羽家墓所　丹1